

● 野尻湖

● 青木湖

● 木崎湖

● 諏訪湖

K A P P A N O V E L S

長編推理小説

影の地帯

松本清張



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 影の地帯

¥680

昭和36年3月10日 初版発行

昭和55年3月10日 99刷発行

著者 松本清張

東京都杉並区高井戸東1-22-3

発行者 小保方宇三郎

印刷者 堀内俊一

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀内印刷

発行所

東京都文京区音羽2
振替東京115347

株式会社 光文社
電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Seityō Matumoto 1961

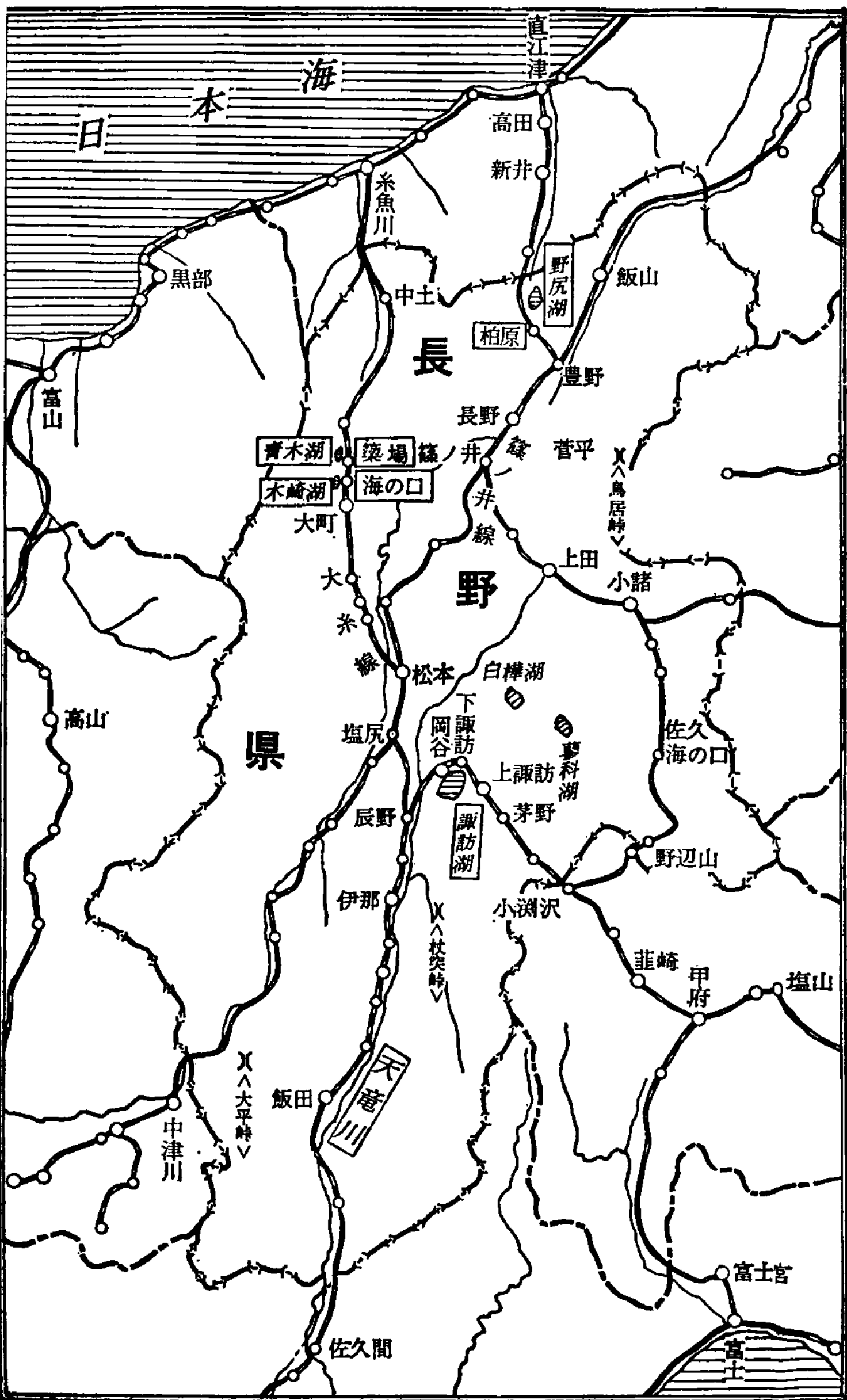
(分)0-2-93(製)03007(出)2271 (0)

影の地帯

まつもと せいちょう
松本清張



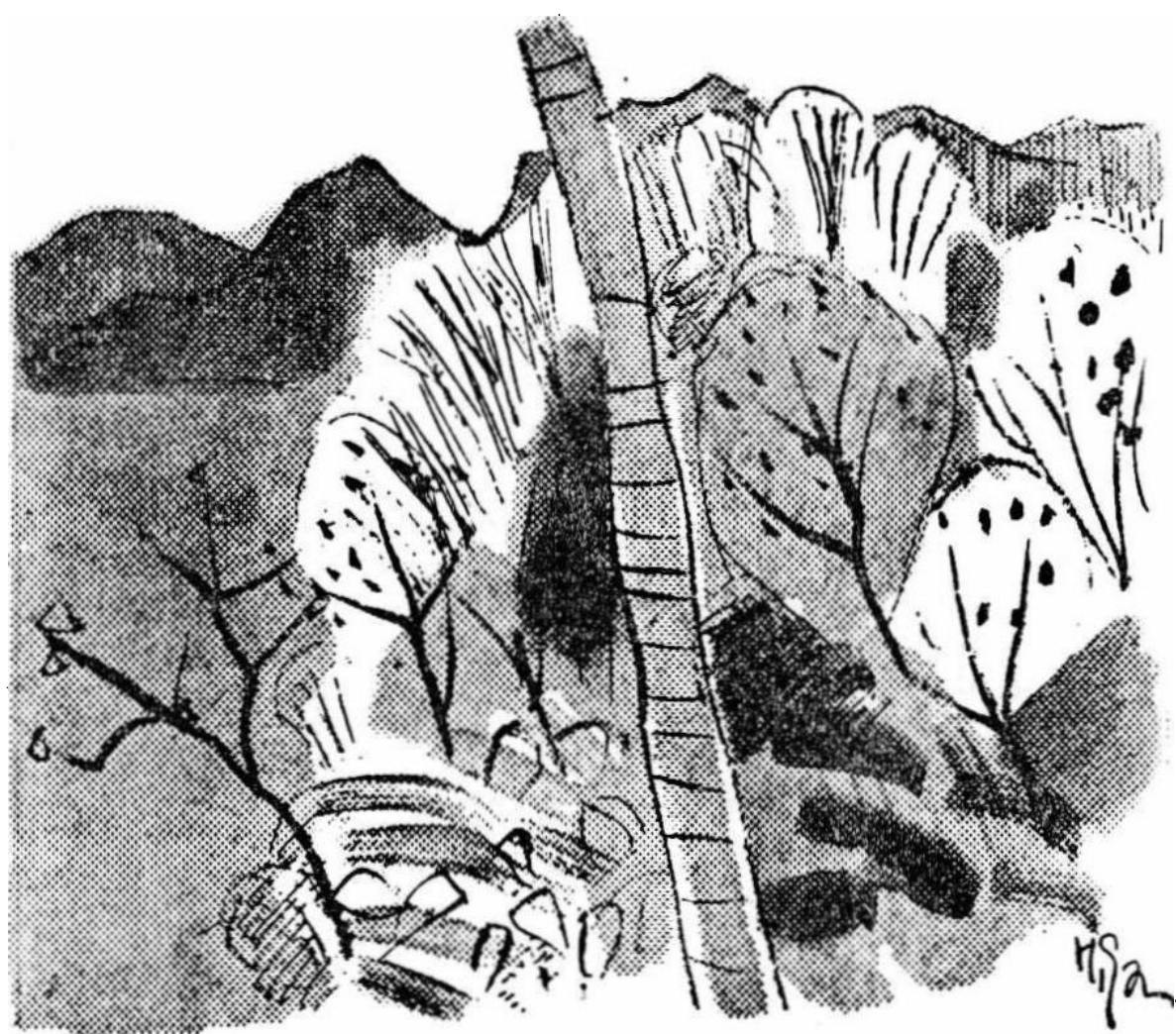
カッパ・ノベルス



目次

第一章	羽田 はねだ の客	七
第二章	新築工場	二六
第三章	再会	四六
第四章	湖畔めぐり	五五
第五章	政治家失踪 しつそう	九六
第六章	目撃者	一三三
第七章	パラフィン	一四六

第八章	搜查陣	一〇
第九章	木南 きなん 乗り出す	一八
第十章	木箱の行方 ゆくえ	二五
第十一章	索	三五
第十二章	敵	三七
第十三章	霧 きり の女	二九
第十四章	暗示	三六
第十五章	ふたたび柏原 かしわはら にて	三五
第十六章	追跡	三九
第十七章	終局	四七



第一章 羽田の客

1

田代利介は、福岡の板付空港発十二時五十分の日航機に乗ったが、機が離陸してまもなく、北九州の空にかかるころから、シートに崩れかかるように寝込んでしまった。

この十日間、彼は九州を一周り歩いて疲れた。別府、宮崎、鹿児島、雲仙と回り、それぞれのキャンプで練習しているプロ野球チームの写真を撮ってきたのだ。田代利介は、若いのに似合わず野球にはあまり興味が無い。そのような写真を撮りにわざわざ東京から九州に来たのは、雑誌社に頼まれたためである。

田代利介はカメラマンである。腕が確かなのと、対象を見つめるのに独特のエスプリがあり、彼の写真には洗練された「眼」があるというので評判がよかった。「斬新だ。」

「何よりも芸術性と、社会的センスとが融合している。腕だけに頼りかかる職人的な写真家の多い中に、すぐれた才能をもっている。」

というのが、批評家や、雑誌編集者たちの彼への評価であつた。

田代利介は、どこの出版社や雑誌にも属さず、いわゆるフリーのカメラマンであつた。しかし、近来、めきめきと名前を売り出して、そのネーム・パリエーと技術とで、各社から引っぱりだこの流行児であつた。昭和三年生まれ。一月に三十二歳となつた。まだ独身である。

近ごろは、雑誌も、月刊誌のほか、週刊誌がむやみとふえて、それぞれグラビアに力を入れている。雑誌も読む活字のほか、目にたのしむ写真に重点をおいているのだ。だから、毎号、各誌ともグラビアの競争である。

写真家にも、その得意とする写材によって婦人科とか社会科とか呼ばれる妙な分類がある。いわゆるヌードと称する女性を撮るのが婦人科だが、田代利介は、そういうものはあまり興味がなく、現代の生々しい社会現象をキャッチするのに意欲が湧くのである。彼は、社会科の新進であつた。

田代利介は、飛行機の上で、二時間はぐっすりと眠つた。ねむりこけても、膝の上に、三つの愛機や付属品を入れた大きなバッグをしっかりと抱えこんでいるのは、さすがであつた。

天気がいい。飛行機は単調な爆音を聞かせて、少しも動揺がなく、卵を立てていても倒れないだろうと思われた。そこで、よけい眠れたのだ。

「——みなさま。ただ今、伊勢湾の上にかかりました。……ウイ・アー・フライング・オーバー・イセ・ベイ……サンキュ。」

鼻にかかったスチュワーデスの甘いアナウンスが流れる。

田代利介は、ふと眠りからさめた。目をこすって下を見ると、蒼い海が下にひろがっていた。

彼は後頭部をまた座席の背にのせて、薄目をあけた。座席は満員であつた。四、五十人ぐらひは乗っているであろう。よくも、こんなに忙しい人が揃っているものだ、彼はいつも感心するのだ。見渡したところ、中年以上の紳士がほとんどで、婦人客は五、六人ぐらひしか

いない。飛行機の客は、汽車と違って、あまり話をかわしていいのが特徴だ。雑誌をよむか、眠っているか、丸い窓の中から下を覗いているかしている。

田代利介の席は、機のほぼ中央部で、これは、外の景色が機翼に邪魔されて展望があまり利かないのである。が、何度も、この空路を商売上往復している彼にとって、別に眺望の興味もなかった。

（東京へ着いたら、また忙しくなるな）

ぼんやりそんなことを考えている。目下、かかえている三つの仕事のスケジュールなどを思っていた。この機が羽田に着くのは、午後四時である。

羽田には助手の木崎が待っていて、彼の撮してきたフィルムを受け取ると、すぐ車で仕事場に帰り、現像室に飛びこむように手配ができていた。彼は、その間の二、三時間、銀座裏をまわって、酒を飲むつもりでいた。十日間という地方回りのあとだけに、それが愉しみなのだ。

窓を見ると、海は山岳に変わり、遠い空の下にアルプスの連山が白く光っていた。天気がいいだけに今日はかなり高度を上げているらしい。木曾の御岳がくっきり見えた。

（そうだ、来月にはいったら、湖畔めぐりだったな）

木曾が見えたから、田代利介はまた仕事のことを思った。Aという雑誌の企画で、全国のおもだった湖を写真グラビアにしようというのである。こんなことで、彼は年中、旅から旅に追われている。

しかし、この湖畔めぐりは、彼にはたのしい仕事なのだ。プロ野球のキャンプめぐりなどよりは、ずっと詩情をとり入れることができて、意欲がわくのだ。

「——みなさまの左手に富士山が見えてまいりました。……ウイ・ファインド・マウント・フジ・オン・ザ・レフト・サイド。」

丸い窓の中に、早春の富士山が輝くような姿でせり出してきた。

田代利介は、急に思いつくと、バッグの中からカメラをとり出し、それに太い筒の望遠レンズをとりつけた。立ちあがって、後部に行ったのは、撮影に適当な窓を捜すためである。

ところが、いい位置の窓の横には、若い女がうつむいて本をよんでいた。黒っぽい洋装に、黒い帽子をかぶった横顔のきれいな女である。

田代はためらった。これが男なら、たとえ眠っていても、ゆり起こしてでも、ちよつとからだの位置をかえてもらうのだが、若い女性だと彼にも遠慮が出る。

そのうち、富士山の方では、容赦なく飛行機^{飛行機}の速度だけ、窓の中に移動しているの、早くしないと、後方にずりさがってしまう。あいにくなことに、今日の富士山は、真つ白な中に、ひだの陰影がくつきりについて、立体感がすばらしいのである。

田代利介の躊躇^{ちゅうちよ}も、わきあがってくる撮影意欲には勝てなかった。

「恐れ入りますが、」

と、彼は脂気^{あぶらけ}のない、ぼさぼさした長い髪を掻いた。

「ちよつと富士山を撮^とりたいんですが……」

窓際にすわっている女は、本から目を上げて、田代利介を見た。通路に立っている田代を見上げる恰好になったのだが、ほっそりした顔に、瞳^{ひとみ}が大きかった。

「あら。」

というような唇の動かし方をして、くるりと窓の方を振り向き、次にまた、田代の方へ顔を出して、

「どうぞ。」

と言って、カメラの邪魔にならぬよう、背を前の方にすこし屈^かめた。

「すみません。」

田代は礼を言い、望遠レンズを窓に向けたが、思うような位置に安定するためには、こっちの座席の人、つまり女とならんですわっている、隣りの乗客にも、少しからだをずらしでもらわねばならない。

それは、三十四、五歳ぐらいの小太りの男で、週刊誌か何かを読んでいるのだが、肩幅ががっちりとして広かった。

「恐れ入ります。」

田代は、その男にも頼んだが、男は彼の方を見向きもせず、それでも、わずかだがからだを動かしてくれた。いやいやながら、仕方なしにそうしたといった動作だった。

「どうも。」

田代利介は、また礼を言った。

ファインダーをのぞくと、二〇〇ミリの望遠レンズに拡大された富士山は、急に彼の目に迫ってきた。晴れた蒼空^{あおぞら}だから、濃いフィルターでは、バックがぐっと黒

く落ちて、真っ白な対象が強く浮きあがるに違いない。

田代利介は、五、六度つづけざまにシャッターの音を鳴らせた。

それから、カメラを目からはずして、便利をはかつてくれた男女の客に礼を述べようと思っていると、

「それ、大きく見えますの？」

と、若い女が田代の持つている筒型の望遠レンズを目でさした。

「はあ、それは大きく見えます。」

田代はカメラを手に抱えたまま答えた。

女は、黒い大きな目を見開いて、田代を見ている。いかにも好奇心に満ちた瞳であつた。細い線の顔に、稚なげなものが残っていて、それがよけいに彼女の好奇心を子供っぽくみせた。

「ちよっと、貸していただけますか？」

女は微笑しながら言った。

横の小太りの男がそれをとめるように女をつついた。無作法をたしなめるには、ひどく不愉快な顔つきをしている。

田代はそれを見ると、男に反発を覚え、

「いいですよ。どうぞ。」

と、自分からカメラを女に差し出した。

「重い。」

女は、長い筒のついたカメラを手にとって言った。ここにこしていた。上から見おろしている位置の田代が見て、きれいな笑い顔だと思つたのである。思わず被写体を見つめる目になつていた。女はさっそく、カメラを目に当てて、窓を向いた。

「うわあ、大きい。」

と、彼女は叫んだ。

「すてきだわ。富士山がすぐそこにあるみたい。きれいだわ。」

富士山の位置が、窓からよほど後ろにずれていただけに、彼女の首も後ろにねじまがつていた。黒い帽子と、黒っぽい服だから、衿足が浮き立つように白い。

「ちよっとしたグレース・ケリーね。」

と、女は小さく言った。はしゃいだ声だった。

カメラを覗いている彼女を見て、映画の「裏窓」の一場面を思い出していた田代は、女がちょうどそのことを言つたので、微笑が出た。

横の座席の男はひどく苦りきった顔をして、週刊誌に目を落としている。しかし、心が活字に吸収されていまいことは、そのようすを見てもわかるのである。

(いったい、この男と女はなんだろう?)

田代利介は思った。

(夫婦でもなさそうだし、恋人とも思われない。兄妹かな)

兄妹にしては、全然、似ていないのだ。男は頬骨が高く、唇が厚い。

「いかが?」

女は、目からはずしたカメラを、横の男にすすめた。

田代が思ったとおり、彼は首を振った。そのむっつりしたようすは、早く返した方がいい、と言っているようだった。

「どうもありがとう。」

女はカメラを重そうに田代の方へさし出した。きれいな目だ、と田代はまた思った。

2

田代は自分の座席にかえった。カメラをバッグに納め、

いつでも肩にかける用意をして腕組みした。

窓の外を見ると、機は伊豆半島の上に来ていた。

(ちよっときれいな女だな)

田代は、カメラを貸した女の印象を、目に浮かべていた。

海の色は、夕方で赤味を帯びていた。

(あの女の横にすわっている男はいったい何だろう?)

彼はまた考えはじめた。

(夫婦ではない。恋人どうしでもない。兄妹でもない……)

と順々に繰り返して、

(それじゃ、女の姉の亭主かな)

と思いついた。この考え方の方がいちばん適切に当たっているように思われた。それにしても、いやに田代を警戒しているようすがみえたので、彼は不愉快だった。

(東京者かな、九州の人間かな)

この機は福岡の板付空港から出たので、当然、彼女たちもそこから搭乗したのだが、女の言葉のアクセントは東京のものだった。

「みなさま。あと十分ばかりで羽田空港に着陸いたします」

す。恐れ入りますが、お座席のバンドをおつけください。
……レディス・エン・ゼンツルメン、ウイ・イル・アラ
イ……」

機のプロペラの音が低くなり、湘南^{しょうなん}地方が流れていた。
田代利介は、あの女について考えることが、ばかばかしくなり、手帳を出して、明日からの仕事の予定表に見入った。おそろしく仕事がつまっていた。

この中で、たのしみは、湖畔めぐりだ。これは休養半分、ゆっくりと各地を歩いてきたいと思った。田代の目には、もう白い雲と、雪の山を倒影している山湖の姿が映っていた。

羽田の空港の建物が見えてきた。機は旋回をはじめ、東京湾に浮いている汽船や小舟の形を大きくひろげながら、滑走路へ近づいた。

機がしばらく地上を滑走して、空港の建物の前に停止すると、乗客はざわざと立ちあがった。

ドアをあけて、降りてゆく乗客を、スチュワーデスが微笑で送っている。

田代利介は、あの女を、もう一度見てやろうと思ったが、やはり癪^{さく}なのでやめた。

太った外人のあとについて、七つ道具を肩にかつぎ、出口へ向かう通路を歩いていると、

「先生。」

と、出迎え人の群れの中から、助手の木崎が目を輝かせて、とび出してきた。

「おう、ご苦労さん。」

田代は声をかけて、肩の七つ道具のはいったバッグを渡した。

木崎はカメラマン気どりで、ベレー帽に、ジャンパーを着ている。田代から渡されたバッグを得々^{とくどく}と肩にかけると、

「先生、九州はいかがでした？」

と、ませた口のきき方をした。

田代は、うむ、と口の中で言っ、立ちどまりながらパイプをくわえ、火をつけたが、実は、彼を追い越して出口の方へ流れてゆく乗客の中から、例の女を見ようとするつもりである。

が、まだ、あの女は見えなかった、よほど、あとから来ているらしい。

「先生、表に車を待たせてあります。」

木崎が言うので、田代は仕方なしに歩きだした。

「向こうは、暖かいでしょう？」

木崎はつづけた。久しぶりに見る師匠の顔がうれしいらしく、どこか浮き浮きした調子だった。

「まあね。九州でも南の方だったから。」

田代は、なるべくゆっくりと待合室を通り、玄関の方へ歩く。

ここで、後ろをふり返ってみようかな、と思ったが、もうちよつとあとでもいいな、と考え直した。

どうして、こう、あの若い女が気になるのかわからなかった。

「長島や広岡の調子はどうでした？」

野球好きの木崎は、プロ選手のようにすをききたがった。

「うむ、よく打っていたようだよ。」

田代は、あまり野球に興味がなく、したがって知識がない。

「西鉄は、島原に行っているんですね。稲尾の肩の調子はどうなんです？」

田代は、眠そうな目をしている稲尾選手の顔や、投球モーションの写真をフィルムで三本ぐらい撮ってきてい

るが、彼の調子がいいのか悪いのかわからなかった。

「よく投げていたよ。」

と、いいかげんな返事をした。

「監督に会ったんでしょう？ 優勝を狙ってると言っていましたか？」

と、木崎の質問は際限がなかった。

そのうち、空港の玄関に来てしまつて、木崎が手を上げると、ハイヤーが滑るように近づいてきた。

「どうぞ。」

運転手がドアをあける。

田代利介が、思いきつて後ろを振り向くと、つい目の前を例の若い女が連れの男と歩いてくる。

とたんに、黒っぽい洋装の女は、田代と目が正面に会った。

女が微笑して、田代に会釈したのは、カメラを見せてもらった札のつもりらしい。やはり目が印象的なのである。

田代も、軽く頭を下げたが、視線が女の横にならんでいる男の顔に移ると、その男のあきらかに不愉快な表情につき当たった。

小太りの男で、からだもずんぐりしている。頬骨が高くて、あから顔なのだ。それがじろりと田代を睨むように見ると、女を促して急いで通りすぎ、タクシーを呼んだ。

「先生、」

木崎が、ぼんやり立っている田代に、

「いまの女のひと、ご存じなんですか？」ときく。

「いや、知らない。いまの飛行機の中で、見ただけだ。」

田代はハイヤーに乗りこみながら答えた。

「きれいなひとですねえ。」

木崎は、あとから乗って、

「やっぱり、飛行機族の女は、どこがちがうんでしょうね。」

と感心したように話しかける。

「どこがちがうんだね？」

「身分ですよ。金持ちなんでしょうね？」

「そうでもないさ。金のないおれだって、飛行機に乗っているもの。」

「先生のは商売ですからね。普通の女は違いますよ。」

車は羽田の空港をはなれ、電車通りを品川に向かって走る。

田代も、いまの女の正体を考えていた。それほどブルジョアの令嬢とも思えないし、バーの女給とも思えない。なんとなく優雅なところがある。

あの男、いったい、何だろう。田代を女に近づけまいとして、極力、警戒しているようにみえたが。

まもなく、品川を通りすぎて、車はしだいに都心に近づいてきた。

陽は、もう暮れて、街の灯の海がひろがっておしよせてくる。

久しぶりに見る東京の灯だ。田舎ばかり回っていた田代は、感動した。平常はなんとも思わないのだが、東京は、やはり大都会だと感じた。

「木崎君。」

田代は助手を呼んだ。

「はあ。」

「君、この車で、まっすぐ仕事場へ帰って現像の準備にかかってくれ、急ぐのだ。」

「先生は？」